

2024 年度「深田賞」受賞者 顕彰理由

奥園 誠之（おくぞの せいし）

奥園誠之氏は、1962 年（昭和 37 年）鹿児島大学文理学部理学科地学専攻を卒業し、同年、創立間もない日本道路公団に入社した。そして、日本初の高速道路である名神高速道路の建設現場に配属となり、実務と研究開発のスタートを切った。その 28 年後（1990 年、平成 2 年）に日本道路公団を退職、(財)高速道路技術センター参与（首席調査役）となり、1996 年（平成 8 年）から 2008 年（平成 20 年）まで九州産業大学工学部土木工学科教授を務めた。その後も高速道路関係のアドバイザーや顧問を複数勤め、現在に至っている。

奥園誠之氏は入社 2 年後に日本道路公団試験研究所に配属となり、その後 22 年余の長きにわたって、当時の日本では技術的に未熟であった「高速道路建設」における道路土工分野の調査・解析・設計・施工・品質管理などの技術の確立と要領化に大きく貢献した。当時の同氏の研究開発への並々ならぬ情熱は、「日本道路公団試験所報告」に掲載された膨大な報告記事から推し量ることができる。同氏の本格的な機械化施工と品質管理基準制定への取り組みや切土・盛土のり面の設計手法、のり面保護工の標準化などは、現行基準の源となった。特に、応用地質学的知見を組み込んだ人工斜面（切土・盛土のり面）の設計理論と標準化モデルの体系化は、業務の効率化に大きく寄与することとなった。日本道路公団退職後は、九州産業大学、また、約 10 大学の工学部、理工学部、理学部で教鞭をとり、土質工学に応用地質学の基礎を組み込んだ斜面防災概論などを中心とした教育、研究指導を行い、後進を育成してきた。

奥園氏が所属機関における研究、技術指導に留まらず、多様な機関より依頼を受けて専門家として数多くの活動を展開してきたことは衆目の一致するところであり、現在ある人工法面等の多くに同氏の足跡を見ることができる。さらに、奥園氏は、地盤工学会、日本応用地質学会、土木学会など学会を横断して多くの役職を務めるとともに、運営にも尽力してきた。

上記のように、奥園誠之氏が土木工学の分野である切土や斜面施工の技術的黎明期に、応用地質学的な見地に立った技術を大きく発展・浸透させ、また、教育機関とともに学協会も通じて地質工学の教育・普及に大きく貢献したことは極めて高く評価される。これらのことから、奥園誠之氏をここに顕彰する。

2024 年 9 月 25 日
公益財団法人 深田地質研究所
理事長 千木良雅弘